

[分類] 普及技術

[成果名] リンゴ炭疽病防除にナリアWDGが有効である。

[要約] リンゴ炭疽病防除にナリアWDGの2,000倍液を散布する。本剤の1成分ピラクロストロピンはストロビルリン系薬剤である。連用は避け異なる系統の薬剤と輪番で使用する。

[担当] 果樹試験場 病害虫土壌肥料部

[部会] 病虫部会

1 背景・ねらい

リンゴ炭疽病に対するナリアWDGの防除効果および薬害発生の有無を検討する。

2 成果の内容・特徴

リンゴ炭疽病防除にナリアWDGの2,000倍液を散布する。

農薬登録内容

ナリアWDG

[一般名及び成分含量] ピラクロストロピン6.8%、ボスカリド13.6%

[毒性] 人畜毒性：普通物 [魚毒性] C類

[対象作物に対する適用登録状況（平成20年9月26日JPP-NET確認）]

作物名	適用 病害虫名	希釈 倍数	散布液量	使用時期	使用 方法	ピラクロストロピン を含む農薬の 総使用回数	ボスカリドを 含む農薬の 総使用回数
りんご	うどんこ病 褐斑病 黒星病 黒点病 すす点病 すす斑病 炭疽病 斑点落葉病 輪紋病	2000倍	200～700 ℓ/10a	収穫前日 まで	散布	3回以内	3回以内

本試験は純粹に殺菌剤の効果を判定する目的のため、また、適用登録内容決定以前に実施したため、試験における実際の散布回数は適用登録の回数を超えた。

3 利用上の留意点

- (1) 本剤の1成分ピラクロストロピンはストロビルリン系薬剤である。ストロビルリン系薬剤では薬剤耐性菌の出現が懸念されることから、連用は避け異なる系統の薬剤と輪番で使用する。
- (2) ぶどう「ピオーネ」に薬害を生じるおそれがあるので、かからないようにする。
- (3) 魚毒性が強いので、河川、湖沼、養魚池等に飛散流入しないようにする。
- (4) なしでは、開花始めから落花20日頃までの散布は、葉に薬害を生じるおそれがある。
- (5) 西洋なし「ル・レクチェ」には果実に薬害が生じるおそれがある。

4 対象範囲

県下全域

5 具体的データ

- (1) 平成 15 年の試験では対照のオーソサイド水和剤と比較し優る防除効果が、平成 19 年の試験ではほぼ同等の防除効果が認められ、実用性があるものと考えられた。
- (2) いずれの試験でも、葉、果実、新梢に葉害の発生は認められなかった。

表 1 供試薬剤のリンゴ炭疽病に対する効果 (平成 15 年、果樹試験場)

供試薬剤	希釈倍数	調査果数	発病果率 (%)	防除価	葉害
ナリアWDG	2000	88.0	7.8	86.4	なし
ストロビードライフフロアブル	2000	83.7	3.6	93.7	なし
オーソサイド水和剤	800	72.3	12.8	77.6	なし
無 散 布		84.7	57.3		

防除価=100-(散布区の発病果率/無散布区の発病果率)×100

試験場所：果樹試験場場内ほ場 供試品種：つがる（わい性台樹）8年生

試験規模：1区1～2樹、3反復

処理方法：平成 15 年 6 月 3 日、18 日、7 月 1 日、17 日、29 日の合計 5 回、動力噴霧器を用いて 1 樹当たり約 100 の割合で散布した。各回とも展着剤（アグラール 10,000 倍）を加用した。

調査方法：平成 15 年 8 月 11 日以降、発病果は随時計数し除去した。8 月 22 日に全果収穫し発病の有無を調査するとともに、健全果は 9 月 11 日まで貯蔵調査し、累積発病果率を算出した。処理前後に降雨はなかった。葉害発生の有無は散布時、および調査時に肉眼観察によった。

その他：6 月 6 日～収穫期までの間、伝染源として炭疽病菌 (*Colletotrichum acutatum*, *C. gloeosporioides*) を培養したリンゴ休眠枝（オートクレーブ滅菌後）を各樹の樹上約 1.5m の位置に設置した。

表 2 リンゴ炭疽病に対する防除効果 (平成 19 年、果樹試験場)

供試薬剤	希釈倍数	収穫時調査			貯蔵調査			葉害
		調査果数	発病果率 (%)	防除価	調査果数	発病果率 (%)	防除価	
ナリアWDG	2000	156.0	0.8	96.0	55.7	7.6	88.0	なし
フリントフロアブル	3000	138.7	0.8	95.9	60.0	2.2	96.5	なし
オーソサイド水和剤	800	199.3	2.1	89.5	60.0	11.1	82.5	なし
無 散 布		146.3	20.3		60.0	63.3		

防除価は表 1 に同じ

試験場所：果樹試験場場内ほ場 供試品種：つがる（わい性台樹）12 年生

試験規模：1区2～3樹、3反復

処理方法：平成 19 年 6 月 6 日、20 日、7 月 5 日、19 日、の合計 4 回、動力噴霧器を用いて 1 樹当たり約 100 の割合で散布した。各回とも全ての薬剤に展着剤（アグラール 10,000 倍）を加用した。処理前後に降雨はなかった。なお、8 月 6 日には無散布区を含め全区にオーソサイド水和剤 800 倍液、およびトップジン M 水和剤 1,500 倍液を散布した。

調査方法：平成 19 年 8 月 7 日以降、発病果は随時計数し除去した。8 月 28 日に全果収穫し発病の有無を調査し、発病果率を算出した。収穫時健全果の内各区 60 果 (60 果に満たなかった区は全果) を室温 (平均 24.4℃) で 9 月 10 日まで貯蔵して発病の有無を調査し、発病果率を算出した。葉害発生の有無は散布時、および調査時に肉眼観察によった。また、発病果の中から無作為に選んだ果実の病斑から、定法により菌を分離し、佐藤らの方法により菌種を判定した。

その他：6 月 7 日から収穫期までの間、伝染源として炭疽病菌 (*Colletotrichum acutatum*, *C. gloeosporioides*) を培養したリンゴ休眠枝（オートクレーブ滅菌後）を各樹の樹上約 1.5m の位置に設置した。

6 特記事項

[公開] 制限なし

[課題名、研究期間、予算区分]

果樹の病害虫防除農薬の効果試験、2003、2007 年 (平成 15、19 年)、民間受託